



ピッポ新聞

2009

5

No.243

子どもの本専門店

ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

よもやま話

静岡に空港ができるが・・・

来月静岡に初の空港がオープンすることが、いま地元のメディアを通じて大々的に喧伝されている。ぼくは常々この空港について、不思議に感じていることがある。というのは、ぼくを含めて回りの人間に聞いても、だれもが「静岡に空港など必要がない」と言う。たまたまぼくの周辺の人たちだけがそう思っているだけかもしれないが、だけど、いまだ「賛成」という人に出会ったことがない。みんな反対なのだ。

なのに、空港は莫大な税金を使って、できてしまい、この6月4日がオープンだという。不思議だな！

この空港の正式な名称を「富士山静岡空港」というのだそうだ。これにちなんだ笑いを一つ。とあるおじさんは、空港ができるというので、それじゃ、ちよっくら話の種に見学でもしようと思いついたのだそうだ。

名前の頭に「富士山」とついているのでおじさんは、静岡から東に向かって車を走らせたのである。富士川を渡って富士市にはいり、「空港の工事現場はどこですか？」と尋ねたら、「あんな、なに言ってるだね、空港は大井川の向こうだよ」と言われて、おじさんはおったまげたそう。

静岡市の人間は「富士山」と聞けば静岡から東

京方向へ向かうのが常識なのである。その意味でおじさんはけつして間違っていないからなのである。むしろ大井川の向こうに作ったものを、「富士山」などと冠を付けた方が間違っているのだ！

考えてもごらん下さい。空港が位置するのは富士山から、昔でいえば「日本三大急流の一つ富士川」を越え、あべかわ餅の「安倍川」を越え、さらに「こすに越されぬ」大井川という三つの大河を越えなければ、たどり着かないのである。もしかすると、富士山から「富士山静岡空港」までの直線距離よりも、富士山から羽田空港までの直線距離のほうが、近いのではないだろうか？

静岡県だから名前の頭に無理に「富士山」とつけられよいと考えたのだろうか？あまりにも短絡的な思考である。それとも、逆に深謀遠慮で、静岡県民は「富士山」と名付ければ、なんでも受け入れてしまうことも考えてのことなのか？

そういえば、「富士山を世界遺産に」などという官製運動もあったけどあれだって、富士山のすそ野には現役の自衛隊や米軍の射撃訓練用軍事基地や駐屯場があるのを考えれば、常識はずれた運動である。「富士山」ということで、多くの県民が運動に賛成のようであるが・・・。現役の軍事基地のある場所が、世界遺産に登録可能なのだろうか？ユネスコはそんな場所を世界遺産として認めるものだろうか？本当に世界遺産に登録を願うのであれば、まずは軍事基地撤去運動から、はじめることこそが近道だとぼくは思うな。

(11 ページへ)

ヒヤンキの名作『くちばし』 二つの版の謎をとく

第十一回

”ワジの教え”

動物学者 今泉吉晴

結末で破綻

前回、私は『どろくはなくても』をいっ
こう話が進まない物語と批判しました。く
りかえし見てきたとおり、原作『斧をもた
ない匠』では、主人公の「ぼく」が鳥たち
それぞれとの一期一会の出会いから大いに
学んで成長し、鳥と巣についての認識を深
める様を描いています。そして、ついに木
の幹に穴をうがっ、くちばし使いの hands、
キツツキとの出会いを契機に「鳥たちはみ
な、オノをもたない匠」という豊かな内容
をもつ発見（気づき）に至りました。

物語の主人公「ぼく」による「鳥たちは
みな、オノをもたない匠」という豊かな発
見の種は、物語の冒頭で示されたロシアの
古いなぞなぞ、「手を使わず、オノも使わ
ずにたてる小さなおうちって、なあに？」

です。

このなぞなぞによって、鳥の巣への関心
をひらかれた「ぼく」は、すぐにカササギ
の巣を見て、なぞなぞのいうとおりかどう
かを調べました。丸太小屋と比べてみると、
なるほど、枝（丸太）を積んでつくってい
る巣の骨組みを始め、床、入り口などの相
対する部分のつくり方が一致していました。
鳥の巣とは鳥が自分でつくる、丸太小屋と
相似の構造物といえました。

カササギの巣はロシアの人々に身近で、
鳥の巣といえば思い浮かべる巣のイメージ
の代表なのでしょう。私たちも同じように
鳥の巣というと、カラスなどの木の小枝を
組んだ枝上の巣を思いうかべます（1 カ
ラスの巣）。じつさい、鳥の巣とは鳥自身
がつくる構造物、という考えは、多くの鳥
類学者が巣の定義として採用しています。
特に日本では現在も広く受け入れられてい
る考えのようです。



1 カラスの巣
道際のミズキにカラスの巣がありました。針
金製のハンガーへのこだわりは、細い木の枝
への嗜好をあらわしているように思えます。

世界大百科事典（1985年の改訂版）

の「巣 nest」の項に、こうあります。
「一般には、動物がみずから造って産卵、
抱卵、育児または休息、就眠に使用する構
造物や穴をいう」（浦本昌紀）。

この記述は「一般には」とあって、多く
の人々（おそらくは動物学者）の考えとし
て述べられていて、必ずしも著者（鳥類学
者）の考えとはいえませんが。そこでまず、
動物学者が巣とは動物自身がつくるもの、
と考えていると分かります。

そして、数行おいて著者自身の考えがこ
う書かれています。

「鳥類の中には、天然の穴や樹洞や他種の
動物が掘った穴をそのまま利用し、しかも
巣穴内になんの材料も持ち込まないで産卵
するものがある。つまり、みずからは何も
造らない。これは厳密に言えば単なる巣穴
であって、巣ではない」。

すなわち、鳥の巣とは自らつくるもの、
と著者自身も考えている、と分かります。
そして現在（2009年）のフリー百科事
典『ウィキペディア』日本語版は「巣」を
こう定義しています。

「巣とは、動物がその生活の必要のために
自分の体外に作る特別な構造であり、その
体の一部ではないものである」。

この言葉はあらゆる動物の巣を視野に入
れたもので、「鳥類」の巣については加え
て「巣を作る鳥類は多い。多くの鳥は繁殖
のために巣を作る」と説明しています
（『ウィキペディア』英語版の定義はまっ
たく違います。それについては後述）。

では、『斧をもたない匠』の刊行（『どうぐはなくても』の奥付によると1952年）と同じころの日本の鳥類学者の考えは、どうか、念のために見ておきましょう。

1955年に刊行された世界大百科事典（平凡社）の「巢」の項目の中に「鳥の巢」という小見出しがあつて、こう書いてあります。

「鳥では地上や岩上のくぼんだ所に産卵するものもあるが、一般には精巧な巢を造り、巢といえは鳥の巢を思い出すほどである」。そして、「古い型の鳥では概して巢は簡単で、高等な燕雀目などには巧妙な巢を営むものが多い」（高島春雄・清棲幸保）と説明しています。

地上や岩上のくぼんだ所に産卵する鳥は、巢をもたない、と明言はしていませんが、つづいて「一般には精巧な巢を造り」といつていることから、巢とは自分でつくる構造物であることを条件にしている、と解釈できます。

加えて進化学的な説明があつて、巧妙な巢を作るのは多くは高等な鳥である、としています。また、「古い型の鳥では概して巢は簡単」としていることから、「地上や岩上のくぼんだ所に産卵するもの」は、巢をもたない進化の段階と想定されている、と分かります。

先に、「ぼく」の「鳥たちはみな、オノをもたない匠」という法則性の把握のきっかけは、物語の冒頭で示されたロシアの古いなぞなぞ、「手を使わず、オノも使わずにたてる小さなおうちつて、なあに？」に

はじまる、と書きました。それは以上のように、鳥の巢とは鳥自身がつくる構造物、という現在も通用する定義の原型がロシアの古いなぞなぞによって示されていて、「ぼく」が鳥の巢に関心を向ける最初のきっかけになった、という意味です。

しかし、「鳥たちはみな、オノをもたない匠」という言葉は、ヨタカのように自分では巢をつくらない鳥にも巢がある、という認識であり、鳥の巢を構造物としてとらえて、そうではない段階の巢を排除する見方にくらべ、はるかに広い見方（広く通用する）になっている、といえます。

「ぼく」はどうして、巢をつくらない鳥にも巢がある、と考えることができたのか、改めてヨタカの項をみておきましょう。

鳥の巣づくりを手助けしたいと、斧を手「ぼく」が野原にとびだして最初にであったヨタカの巣は自分でつくったものではありませんでした。「ぼく」が「ヨタカさん。オノがなくては巣づくりが大変でしょう？」と問うと、「いやいや、なんともないよ。何しろ私は巣をつくらないからね」とはつきり述べたのです。なぞなぞが示唆する、鳥の巣とは鳥自身がつくる構造物という受け止め方に、疑問を投げるヨタカの巣が「ぼく」の目の前にありました。

ヨタカは率直に本当の姿を「ぼく」にみせてくれました。「どんなところで卵をあたためているか、見せてあげましょう。ほら！」とヨタカは飛び立って、抱いていた二つの卵を見せたのです。「ぼく」は卵が地面の自然にできたくぼみにおさまって

いて、巢に必要なとされる最小限の構造（周囲よりくぼんだ床）が備わっている、と素早く見て取りました（2へこんだ地面？）。そこで「ぼく」は、巢を自分でつくらなくても、自然の微地形を使つてもよいと若干変えて受け止めれば、ヨタカの巣も巢である、と理解することができました。それにヨタカの巣が「ぼく」と読者に伝えたもつと大切なことがありました。それは、ヨタカが最小限の巢を何に使っているか、を見せてくれたことです。巢とは卵を産み、あため、雛を育てる場所、ということが、質素な巣であるだけに「ぼく」にも、読者にも見誤りようもなくはつきりと示されました。



2へこんだ地面？
『どうぐはなくても』より。ヨタカが飛び立つと、地面の小さなくぼみに二つの卵がならんでいるのが見えた、と文章にあります。つまり、小さなくぼみが巣座です。チャーリーシナ氏が描く絵には、くぼみが見あたらないのはなぜでしょう。

ピアンキが、地面の自然な微地形を活用した、構造といえるものがほとんどないヨ

タカノ巣を、「ぼく」が野原であつ最初の巣にもつてきたのには、深いわけがあつたと思えます。巣らしきものがないために「ぼく」は、これからヨタカは巣をつくるころ、と見て、先のように「オノがなくては巣づくりが大変でしょう？」と問いました。ところが意外にも、すでにヨタカは卵を産み終えていて、見せてくれることになり、鳥の巣とは自分でつくる構造物と理解したばかりの「ぼく」と読者に、もつと根本から巣とは卵を産み、育てるところ、という鳥にとつての切実な問題から問いなおす、強い印象を与えました。

私が見たヨタカの巣

私もヨタカの巣を見たことがあります。ピアンキの『斧をもたない匠』を読んで、「鳥たちはみな、オノをもたない匠」という言葉の意味を押しはかる機会をえて、遠い昔の記憶を思い起こし、鳥の巣についての考えを問いなおしました。

新潟県長岡市郊外の東山のふもとの森を散歩していらしたときのことです。「ぼく」が出会ったヨタカと同じように、私が出会ったヨタカも飛び立って巣のありかを伝えてくれました。ただ、巣にあつたのは二つの卵ではなく、二羽の雛がいました。私は雛の成長を見守るために毎日、その場所に通いました。

分かったことの一つに、雛は巣にいつもただ座っているのに、いざという時には走

る、ということがありました（立たないのに、走るのです！走つたと思つたと座つていて、周囲の落葉と見分けがつかせませんでした）。おそらくそのために、私が前日に見た地点（すなわちヨタカが見せてくれた巣）に、次の日もいるとは限らず、たいいてい数メートルはなれた別の地点にいて、どこにいるのか、新しい巣場所のありかを見つけてるのがとても難しかったのです。つまり、巣のありかが毎日のように変わりました。

ただし、巣が移動したのは暗い森の中の明るい広葉樹のせまい一画で、その中をたえず移りすんで一画の全体を巣にしているかのようにした（私は夜の狩りにでたヨタカがもどつて雛たちを呼び集めるために巣の位置が変わるのではないかと想像しました）。

ということとは、ヨタカの巣とは一地点に定まつているとは限らず、臨機応変に地点を変える性格のものであります。それも、巣を移動すると見るより、森の明るい一画という広がりのある場所の全域を巣にしている、と見た方が実際のあり方に近い、と考えなおしました。ヨタカにとつて居場所の変更は敵に見つかりにくくする一つの術策といえます。

もし、ヨタカがカササギのようなしつかりした構造の巣をもつていたら、巣の位置を日ごとに変えるわけにはいきません。つまり、簡素な巣には簡素なりの利点があり、簡素でなくてはならない積極的な理由があつて、原始的だから簡素とは限りません。このように、自分では巣をつくらぬヨタカ

を含むすべての鳥が匠（巣づくりの名人）である、というピアンキが「ぼく」を通して読者に伝える着想は、巣を周囲から切り離して単独の構造物とみる多くの鳥類学者の定義をこえて、近隣の環境とあわせてみる見方（住環境としてみる見方）をもつていて、豊かな内容になっています。

そこで私がみつけた、鳥にとつて巣とは何かを説得的に伝える定義は、オーストラリアの鳥類学者、ステファン・マーチャント（Stephen Marchant）によるものです。

マーチャントは現に知られている世界のあらゆる鳥の巣と、巣にかかわる鳥の習性を調べて「巣（nest = 鳥の巣という意味）」とは、鳥が卵を産み、孵化するまでとめおくところ、と定義しました（A New Dictionary Of Birds, 1964の「nest」の項。ちなみに、フリー百科事典『ウィキペディア』英語版の「nest（巣）」の定義はマーチャントの定義を踏襲していて、日本語版と違います）。最小限の要点を述べて、広く鳥の巣を扱える定義になっており、ピアンキの理解に一致します。

鳥類は、飛行能力を獲得して成功した動物グループです。ヘンリー・ソローは、鳥の飛行能力をこう讃えています。「ガンは私たちに比べ、はるかに広い世界を股にかけて生きる生粋の国際人です。朝食をカナダでとり、昼食はオハイオ川畔で食べます。夜には南部の海岸湿地、バイユーで悠々と羽毛を整えています」（『ウォールデン森の生活』、1854、今泉吉晴訳、小学館）。

しかし、長所は短所です。鳥類は飛行能力を高めるために体を可能なかぎり軽くして、顎の歯をすべて退化させてなくしたほどです。地上でくらす動物にくらべ体がぎやしゃです。もし、何かの事情で飛べなくなったら、たちまち地上の捕食者に食べられてしまうでしょう。鳥が地上の定まった場所を飛ばずに過ごす、卵を産み、孵化させるまでの日時をどうしのぐか、という大きなくらしの課題を背負い込みました。

そこで巣とは、鳥が卵を産み、孵化させるまでの日時を安全に過ごすための仕組み、すなわち、鳥の生存の課題への回答です。単に鳥がつくる構造物といった定義では、くみとれない特別な役割をになっています。こみ入った構造の巢から、自然の微地形を巧みに利用した巢まで、さまざまに成功した回答があるといえ、巣をどう考えるかが『斧をもたない匠』のテーマでもある、と分かります。

主人公の「ぼく」が引き続きツリスガラ、ツバメ、ウタツグミ、キツツキというふうに出会った鳥の巣は、それぞれに素材、つくり方、姿形、美しさが独特で、巣がつくられる場所も枝先、軒下、太枝の上、木の幹とみな違いました。すべて、くちばしや足などの体の道具でつくられていて、美しく、機能的で、人間のシンプルな家づくりの道具斧さえ少しも役に立ちそうにもない素晴らしさでした。

つまり、人間にはつくれそうにないものでした。斧を使ってもらえれば、巣づくり

を楽にしてあげられる、という「ぼく」に、深い衝撃をあたらせたばかりか、人と道具との関係に反省をせまりさえしました。

それに、ヨタカの巣のあり方がヒントになって、巣とは巣そのもののつくりに加え、巣の場所と取り巻く住環境も含めて見るべきものと分かってきました。そしてキツツキのくちばし使いの心意気を知るにおよんで「ぼく」にぴんときたことは、「鳥たちはみな、オノをもたない匠です」という大きな気付きでした。ただし、この気付きはふと頭に浮かんだ考えであって、確信には至っておらず、「(鳥はみな)匠なのではないか」という一種の仮説です。しかし、単に自分が出会った鳥のことをいうのではなく、「鳥たちはみな」という鳥のすべてが巣づくりの名人、として大きく認識しようとしているところが、大きな飛躍があつてみそです。

この気付きは、おそらく二つの仮説を含んでいます。一つは鳥に斧を使ってもらいたい、という気持が一つの納得にいたりました。すなわち、鳥たちはそれぞれに人間の匠に勝るとも劣らない道具(くちばし)使いの名手で、斧の助けを少しも必要としない、とほぼ納得しました。すべての鳥がじっさいにそのとおりかは、検証が必要です。

もう一つは、鳥にとって巣とは何かについて「ぼく」の回答です。ヨタカのように自分では巣をつくらない鳥をふくめて、すべての鳥が巣づくりの名人であつて、それぞれに卵を産み、育てるのによい巣と設

置場所を選ぶ能力をもっている、という理解です。

以上の検討から、いよいよはつきりしたのは、この作品はビアンキが考えに考えを重ねた緻密な構成になっていることです。主人公「ぼく」が鳥になんとしても斧を使ってもらいたいと、鳥との出会いを重ねて鳥から直接物事を知る冒険の物語であると同時に、鳥にとって巣とは何か(ひいては鳥とはどういう動物か)、を追求する探求の物語でもあつて、それら両者を詩的・文芸的表現をもつて、分かりやすく、イメージ豊かに、緻密な表現で伝えていきます。子どもも大人も、幼い子どもも、誰もがそれぞれの関心で楽しむことができる優れた作品です。

では、まず私の試訳による原作『斧をもたない匠』のワシの項を読み進み、あわせて仮説の検証をして、ついで田中氏による「文」作品『どうぐはなくても』で描かれる巢材にあらゆる道具を受け入れるワシの話の吟味にかかることにしましょう。

ワシの出現に、はやる気持

これから見ようとしている、物語の終わりの項はキツツキの項の結論、「鳥たちはみな、オノをもたない匠です」を検証する項であると同時に、当然のことながら、物語の決着をつける項です。主人公の「ぼく」も気持の上ではまだまだ斧を使ってもらえない鳥を求めています。読者も同じでしょう。

ワシの出現は物語の結末にふさわしい興奮を呼び起こします。

野生のワシの教え

私の試訳は、田中氏の「文」作品である絵本（『どうくはなくても』）の2見開き（p 28～29とp 30～31）と1ページ（p 32）にわたる、ワシの項（三つに分けて印刷されています）と比べやすいように、2見開きに相当する二つ（前半、後半）に分けてあります。田中氏の「文」作品のワシの項の最後の1ページ（p 32）に印刷された文章に相当するビアンキの文章は原作にあります。

私の試訳が250字ほどであるのに対して、田中氏の「文」作品のワシの項の文字数は450字ほどと、二倍近い字数です。この差は、主として田中氏による書き加えによっています。

ワシの項 私の試訳（前半）

そのとき、ぼくの目にワシの巣がうつりました。

森でいちばん高い、マツの大木の上に、大枝を何十本も重ねあわせて、がっちり組みかためた巣でした。

なんとものすごい巣であることか。

ぼくは考えました。

大きな枝を切るのだから、ワシこそ斧がいるはずだ。

ぼくはマツの木に走りよって叫びました。
「ワシさん、ワシさん。あなたにオノをもつ

てきましたよ」

ワシの項 私の試訳（後半）

ワシが翼をひろげ、重々しい声でいいました。

「少年よ、ありがとう。オノを私が積みあげた大枝の上に投げあげておくれ。その上に私がさらに大枝をつみあげて、ゆるぎない巣にしてみせるから」

キツツキの項のさいごで「ぼく」が鳥たちはみな、オノをもたない匠ではないか、と直感したすぐあと、「ぼく」の目が森からひととき高くそびえるマツの大木に、ワシの巣があるのをとらえました。たくさんの太い落ち枝をかさねた巣で、もし、落ち枝を拾うのではなく木についた太枝をとるのなら、斧がいるのは明らかでした。

そこで、当初の鳥に斧を使つてもらいたい、という思いがよみがえり、「ぼく」はマツの大木に走りよりました。そして、ワシに「あなたにオノをもつてきましたよ」と呼びかけました。

ごく自然な気持の流れで、読者もワシの答えはいかに、と胸をどきどきさせて読み進みます。すると、ワシは、オノを巣の上に投げ上げておくれ、と意外なことをいいます。そして、すぐにその理由を説明しました。「私がその上にさらに大枝をつみあげて、ゆるぎない巣にしてみせるから」、というのです。つまり、斧を巣材にする、というのですが、それは斧を斧としてみないで、斧の柄を木の落ち枝と見たからだ、

と察知できます。

動物が種ごとに人とは違った見方でものを見ている（世界を見ている）、ということとは誰でも知っています。この物語でも、鳥は種ごとに巣に使う巣材が違つと、記されていきました。ツリスガラはヤナギの綿毛を、ツバメは粘土を、自然の中にある無数のものの中から選び採つて巣材にしています。ツリスガラにとつては、ヤナギの綿毛に巣材としての価値があり、粘土には価値がありません。

このように環境にあるものを価値づけてみる動物のものの見方を、ユクスキユルは、動物はものを意味付けして見ている、といいました（Jakob von Uexküll、『生物から見た世界』、岩波文庫、原本の出版は1934年）。もちろん、人間も同じように、独自の意味づけでものを見ています。

ユクスキユルの意味付けの理論の言葉でいえば、ワシは人間が斧と意味づけている物体を、落ち枝と意味付けて見たと云えます。そこでワシは何らためらうことなく、巣に使うから投げあげておくれ、といいました。「ぼく」は意外な言葉にはつとさせられ、そして、すぐにああそうか、ワシのものの方だと気付いたでしょう。

そして、ぼくは斧を使いませんか、と鳥たちにいい続けてきたけど、鳥たちは斧を斧としてみてはいなかった、「斧をもたない匠」という自分の言葉は、鳥にはごく当たり前のこと（鳥の本性にかなうこと）であるのだ、と納得したでしょう。

斧を投げ上げたか

「ぼく」は斧をどうしたでしょうか。それは読者の想像にまかされました。となると、文章にそえられる絵の描き方が問われます。ロシア語原本の絵は、自然のままのワシの巣の絵を描きました(3) お祖父さんのワシ)。それに対して資本主義国家になった最近のロシアの絵本は、斧が巣に差し込まれた絵をのせています(4 巣に投げ込まれた斧)。つまり、「ぼく」は斧をワシがいうとおり巣に投げ上げました。

— Вот спасибо, парнишка! Кинь свой топорёнок в кучу. Я сучков на него ещё навалю — прочная будет постройка, доброе гнездо.



3 お祖父さんのワシ

E・チャール・シン氏は『どつぐはなくても』の絵を描いたN・チャール・シナ氏の祖父にあたる、ということですが、私の手もとにあるロシア語原本に素晴らしい絵を描いています(Master Bez Topora, 1954)。人工物が投げ込まれていない自然な巣を描くという姿勢は、ピアンキの物語にそくしたもので、といえます。

しかし、ワシのいうとおり巣に投げあげたと絵に決めつけられては、読者の想像が妨げられます。なぜなら、ワシのいう意味が本当に分かったのなら、危険な斧を投げ上げるより、落ちた枝を拾って投げ上げた方が親切、とすぐ分かるからです(ワシは斧を木の枝と見ていて、その危険を知りません)。

いやいや、「ぼく」が助けたかったのはワシに限りません。できればすべての鳥の巣づくりを助けたかったのです。となると、すべての鳥たちのそれぞれの要求に応えなければなりません。すでに鳥たちはみな、オノをもたない匠と分かっています。人間よりじょうずに美しく、見事な巣をつくる鳥の巣づくりをどうして手伝うことができるでしょう。できるとしたら、それはすみ場所の全体を守ることです。

しかも、ワシとの出会いで、「オノをもたない匠」には、ユクスキュルのいう意味づけがかかわっていることが明らかに見えてきました。鳥たちはそれぞれに独自の見方で巣の素材を意味づけて見ており、人間がそのいちいちを推測することは不可能です。そこで、人間は自然から学ぶのです。

カラスの巣づくりの再評価

私はここで、針金製のハンガーを使った都会のカラスの巣づくりを改めて取り上げたくありません。私は散歩でよくカラスの巣を見るのですが、人間の目にはハンガーしか映らないほどハンガーばかりできてい

ます(1 カラスの巣)。都会にあふれるさまざまな人工の物質の中で、ハンガーがこれほどお気に入りとはカラスに聞くよりなく、鳥それぞれのもの見方(思い入れ)といっても奥が深いと感じ入ります。

E・T・シートンは、カナダの開拓者時代に、カラスの巣を調べるために木に登りました。そして、カラスの巣ほど美しいものはない、と書いています(The Birds of Manitoba, Proceedings of the United States National Museum, Vol. XXII, 1891)。それは下から仰ぎ見た巣の外観ではなく、間近にみた巣の細部についての感想ですが、ウマの毛などで見事に内張されていた、ということでした。

関連して、これはリスの巣についてですが、巣の内張にハーブを使うことの公衆衛生上の意義を強調しています。そして、ごく最近、ワシ・タカ類が巣にマツやモミの緑の葉を組み込むことで、雛の生存率を上げていることが確認されました(D. Ontiveros, J. Caro & J. Pleguezuelos, Green plant material versus ectoparasites in nests of Bonelli's eagle, J of Zoology, Vol. 274, 2007)。緑の葉へのこだわりもまた、鳥の意味づけの能力によっています。

もちろん、ピアンキはこうしたさまざまな可能性にふれておらず、読者の想像にまかせました。それがこの物語にふさわしい、広い世界に想像力をはばたかせる、余韻のある終わり方です。

— Вот спасибо, парнишка! Кинь свой топорёнок в кучу. Я сучков на него ещё навалю — прочная будет постройка, доброе гнездо.



4 現代のロシアのワシ

現代のロシアでは、巢に斧が投げ込まれた絵の新しい版が刊行されていますが、必ずしもしっかり原文を読み込んで描いた絵とはいえません(2003)。

さて、「鳥たちはみな、オノをもたない匠です」という言葉には二つの仮説が含まれている、と書きましたが、それら二つは以上の検討ですでに検証されました。一つは鳥に斧を使ってもらいたい、という「ぼく」の気持が鳥はそう望んでいない、という納得に変わった、という仮説です。以上の検討から、ワシの項で鳥は確かに斧の使用を望んでいないどころか、斧を斧と見ていないとわかり、より確かに証明されました。

もう一つは、鳥にとって巢とは何かについての「ぼく」の回答です。ヨタカのように自分では巢をつくらない鳥をふくめて、すべての鳥が巣づくりの名人であつて、それぞれに卵を産み、育てるのにもつとも適した巢と住環境を選ぶ能力をもっている、という理解です。

これについてはビアンキの高いマツの木の
上に巢があつた、という記述、強風を受け
とめるに違いないその巢を強化しようとい
うワシの言葉などが、確かにそのとお
り、と答えています。

『どうぐはなくても』のワシの項

私は田中氏の翻訳絵本『くちばし どれ
が一番りっぱ?』でも、物語の終わりに原
作にない言葉を長々とつけ加えた事実を指
摘し、それは原作を大きく損なう行為であ
ると批判しました。『どうぐはなくても』
でも、負けず劣らずの不適切なつけ加えが
なされていて、田中氏の作風と見受けられ
ます。

すなわち、最初の見開き(p 28 ~ 29)の
冒頭の二つの文章、最後の1ページの全文
が田中氏による付け加えです(ただし田中
氏は、二つ目の文章「どうぐは なくても
とりは みんな いえづくりの めいじ
んなのです」は、もともとキツツキの項に
あつた文章を移した、つもりでしょう。し
かし、ワシの項に移しては意味と文脈がま
るで違つてしまつたので、私はキツツキの項
からは削除されたことになり、ワシの項で
はつけ加えにあたる、と判断します)。

ワシの項 田中氏の「文」

p 28 ~ 29の見開き
でも どうぐを つかう とりが いちわ

ぐらい いても
いいと おもいませんか?
どこかに そういう とりは いないもの
でしょうか?
もりの いちばん たかい まつのきに
ワシの いえが ありました。
ふとい えだを やまのように かさねた
とても おおきな いえです。
あのふとい えだを きるには
きつと どうぐが いるはずです。
ワシさん!

えだを きるのは たいへんでしょう?
どうぐを つかいませんか?

p 30 ~ 31の見開き

ワシは つばさを はばたかせながら い
いました。

「ありがたい。」

では その どうぐとやらを いえに な
げこんでくれないかね。

そうしたら そのうえに どんどん えだ
を つみあげていくから。

おかげで とても がんばりやうな いえが
できるだろうよ。

p 32

どうぐは ワシの いえの ざいりょうに
されてしまいました。

どうぐは なくても とりは みんな い
えづくりの めいじんなのです。

とりたちは きょうも どこかで いえを
つくっています。

ほら きこえてきませんか？
とりたちの すをつくる おとが……。

私はすでに、この物語の批評の最初の回（2009年1月号）で、田中氏が原作の「斧」を「道具」に言い換えたための矛盾が最終のワシの項で一気に噴出して、と指摘しています。

原作では「ぼく」がもっているのが木の長い柄がついた斧であるから、ワシは枝とみて巣になげあげてほしい、といった、と分かります。それに対して『どづぐはなくても』では、ワシは「道具をしませんか」と聞かれて、「その道具とやらを家に投げ込んでくれないかね」といい、「頑丈な家ができるだろうよ」とつけ加えるとは、何とどういういかげんな対応か、とおどろかされます。何も感じず（いちいちの道具が巣材として好ましいかどうかの意味づけをせず）、何も考えない（どのような道具なら巣を強化するかを問わない）ワシといわれなくても仕方ないでしょう。すなわち、「道具を使いませんか」と聞かれたのでいわれるままに巣材に使ってみた、ということになり、自分の巣がどうなるうとかまわらないワシです。

それに、田中氏はこの物語の主人公である「ぼく」をはぶくというところでもない改変をしました。つまり、物語の中で主体的にものごとをみて考える人物をはぶきました。自然を探索することを課題にするこの物語が、事物をしつかりみる気のない進行役のピアンキらしき人物によって先導される

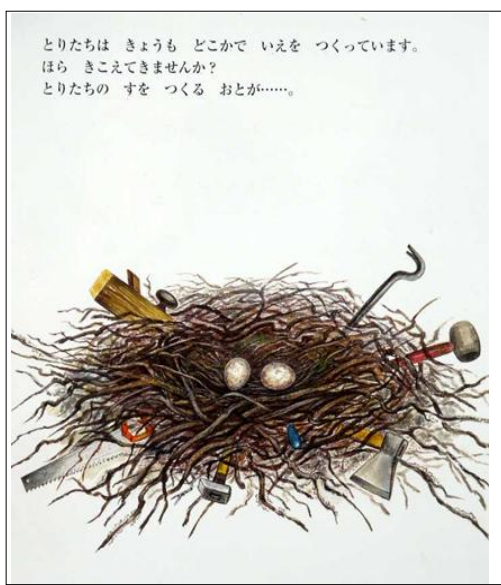
るように変更したのです。それでは自然をしつかり見定めることはできません。ワシの項の冒頭で、ワシの巣をみてついに斧を使ってもらえる、と心をときめかせる原作の「ぼく」に対して、『どづぐはなくても』では、ピアンキらしき人物が「道具を使う鳥が一羽くらいいてもいいと思いませんか？」と、希望的観測を述べるだけです。

「ぼく」はすでに「鳥はみな斧をもたない匠」という鳥の巣の本当の姿にせまる仮説をもっているのに、ピアンキらしき人物は物語の冒頭と同じで焦点の定まった巣の見方に至っていない、という大きな違いが生まれていきます。

そればかりか、原作では斧という一つの道具を代表にして人と道具との関係を見ているのに、『どづぐはなくても』では斧を大工道具のすべてに言い換えてしまうという無謀な改変をしました。ピアンキらしき人物は、とてつもなくたくさんの道具をたずさえて、森を歩いていたと分かり、こっけいですらあります。

その人物がワシにいわれるままに、巣にすべての道具を投げ入れました（5 今日も家をつくる）。人間ばなれした腕力の持ち主です。田中氏が書き加えたpの文章「道具はワシの家の材料にされてしまいました」という言葉で、ピアンキらしき人物が全ての道具を投げ上げたことと知ることができですが、それでは巣が壊れるでしょう。ピアンキの原作にはまるでないことで、日本の翻訳の歴史の中でも特筆すべき改変になっ

るだけ。そして、投げ込まれたすべての道具を、巣を強化する巣材にしてしまったという、本当に巣を強化できたのかどうかを確認できないまま、たたくの仮定の話の根拠にして、「道具はなくても鳥はみんな家づくりの名人のです」というのです。説得力がなく、イメージを喚起する力もなく、聞いてあきれただけです。



5 今日も家をつくる

巣に投げ込まれた大工道具の数々。どんな道具も巣材に受け入れるワシは野生のワシの本性をはずれています。田中氏が改変した物語の筋からみると、斧が描き込まれているのはおかしいことです。しかし、原作からみれば、それ以上に大工道具が描きこまれている方がいっそう問題です。

田中氏が改変した文章はつじつまが合わず、論理がとっていないことは、物語のはじめから多々ありました。しかし、それ以上になぞなぞを省略し、主人公の「ぼく」

を消したうえ、斧という一つの道具を道具という大きな概念におきかえるという改変をして、物語の緻密な構成をくずしたことが致命的であったことはあまりに明らかです。原作が鳥の巣についての奥深い、普遍性のある認識を語っているのに対して、田中氏の作品は矛盾が多く、疑問だらけで、何を語っているのか分かりません。鳥の巣の定義と照らし合わせて議論することなど思いもよらない混乱ぶりです。

そして、つけ加えの文章が多すぎました。『くちばし どれが一番りっぱ？』の終わりのつけ加えの文章と同様、この物語の終わりのつけ加えの文章も傑作です。

「鳥たちは今日もどこかで家をつくっています」とは、何のことでしょうか。「今日も」とは、読者が読むその日のことと思えます。となると、読者が絵本を開くときにはいつでも鳥は巣をつくっていることになりません。鳥は種ごとに決まった繁殖期をもち、卵を産み、あたためるために巣をつくる、と物語の中で示唆されていました。

つまり、巣をつくるのは卵を産むよりまえです。『どろくはなくても』に描かれた鳥の巣にはすでに卵が産み込まれた巣が多いのですが、それでいいのか、私は疑問をもっています。しかし、鳥が一年中巣をつくっている、という田中氏の想定では、自然のスケジュールより卵を見せるサービスが優先する、ということでしょうか。

田中氏は原作を読んだはずで、それでこのような文章を書けるとは驚きです。そして、「ほら聞こえてきませんか？鳥たちの

巣をつくる音が」とは、これまた何のことでしょうか（5 今日も家をつくる）。大工のように音をたてて仕事をする鳥はキツツキ、と物語の中にでてきます。他の鳥たちも人に聞こえる音をたてて巣をつくるというのでしょうか。それとも、想像で鳥の巣づくりの物音を聞きとれ、といっているのでしょうか。田中氏がビアンキの物語を理解できないまま変更していることを見事に伝えていますが、問題はそれ以前のところにあるのかもしれない。子どもたちの本は思いつきで変えていい、という声が聞こえてくるかのようです。

今回読んだ、田中友子氏の「文」によるビアンキ原作『どろくはなくても』の最終のワシの項は、特別な意味をもちます。この作品の表紙にある表記、「ビアンキ原作 田中友子 文」とは、田中氏がビアンキの原作を改変したことを明示するものです。

しかし、何ごとにも限度があります。すでに私は伊藤俊男氏の論説『B級な本の話、あれこれ』（ピッポ新聞、2007年6月号）に依拠して、その限度について論じ、「訳ではなく文としたことは、ある意味で読者を軽視した行為」また「ビアンキ氏にも失礼」と書いた伊藤氏の考えに賛意を表明しました（ピッポ新聞、2009年2月号）。

伊藤氏と私の批判に対して、田中氏と福音館書店は翻案の限度をどこにどう定めているのかを明らかにしていません。そこで、私がワシの項に注目するのは、この項が問

わず語りに田中氏と福音館書店の考えを誰の目にも明らかにしているからです。

どう誰の目にも明らかにしているか、田中氏と福音館書店は翻案の限度について何も考えていないことをワシの項は示しています。この翻案作品で田中氏はビアンキの原文にある「斧」を「道具」に言い換えました。ところが、この翻案作品は科学絵本です。自然の法則に反する改変は許されないのは明らかであるのに、ワシの項の文章の自然の法則からのあまりの逸脱ぶり、改変された文章にあわせてN・チャル・シナ氏によって描かれた数点の、あまりに不自然な絵、これらを見て奇異に感じない人はいないでしょう。それらは田中氏による物語の大幅な改変の当然の帰結です。

この項で田中氏は、あらゆる人間の道具を巣材として受け入れて人間に妥協するワシを描きました。自然の本当の姿を人間社会に伝えるビアンキの原作が、本性を自ら踏みじって妥協するワシを描くはずがないのに、どうしたことでしょうか。

原作は、斧を斧として受け入れることを断固、拒否する鳥たちを描くことをテーマにしており、最後に登場するワシもまた自ら本性にしたがい斧を木の落ち枝として受け入れて、力強い、妥協なき野生のワシであることを証明しています。

田中氏と福音館書店にお伺いしますが、これほど原作から離れて、また、自然の法則に反して、どうして科学絵本といえるのでしょうか？

それに『どろくはなくても』の絵を描い

たN・チャルルーシナ氏は、ロシア語原本でこの物語を読んでいるはずで、原本の内容をこれほど変えたことを、どのようにチャルルーシナ氏に伝えたのか、大工道具を巢に差し込んだ絵を描いて、ピアンキの原作とはまるで違うイメージを読者に伝えた責任は誰が負うのでしょうか？

田中氏と福音館書店に、ピアンキ原作と名うちながら、内容はピアンキとは別物の「偽装翻訳作品」を出版する権利はありません。私は『どろくはなくても』を刊行停止すると共に、読者に謝罪し、補償するよう求めます。

(一面からの続き)

閑話休題。

なぜ名前のことを最初に取りあげたのかと言えば、この空港ほど、「名は体を表している」ものはないと考えたからである。富士山から随分はなれているにもかかわらず、無理に「富士山」などと名前をつけたことと同じように、空港を作ること、直接的、間接的な利益を得る一部の人のほかは、余り賛成者がいないにもかかわらず、無理矢理空港を作ってしまったことに通じるのである。

だから、この空港のことを考えるときには、「無理矢理」というキーワードを頭に置くと、とても良くものが見えてくるのだ。

冷静に考えると、一つの疑問が湧いてくる。

例えば、熱海や特に東伊豆に住んでいる人は、わざわざ静岡空港まで出向いて、そこから飛行機に乗るだろうか？羽田空港を利用した方が余程交通の便は良いし、便利だろう。時間的にも羽田の方が短時間で着くだろう。

浜松在住の人は便数や行く先が限られた静岡空港を利用するだろうか？中部国際空港を利用した方がよほど使い勝手が良いだろうし、時間的にもあまり変わらないだろう。だれが考えたってこの空港は利用価値はあまりないのである。

常々思っていることだが、なぜこの国では、権力者が強引に行った施策が明らかに失敗し、国民や県民に損害を与えたり、あるいは一部の人間の利益にしかならない場合は、その施策者の責任追及や弁償することが求められないのだろうか？

年金問題で首になつたキャリアの厚生官僚が一人でもいただろうか？「富士山静岡空港」についても同じである。

分かりやすい身近な例を揚げようか

空港近くの立木がよつやく伐採されたこと、夕方(5月14日)のテレビニュースは告げていたが、そもそもこの立木問題は、県側の測量ミスで、空港に隣接する私有地の百何十本かの立木が航空法に抵触する高さを

超えていたのである。このため、県は開港を3か月延期せざるを得なかつたし、滑走路を短縮せざるを得なかつた。

それゆえ余分な工事費が何億円だか掛かつたという。この場合の余分に掛かつた工事費は責任者が個人的に負担すべきではないのか？それと、伐採した後は、本来の滑走路の長さに戻す(それでなければ小型機しか着陸できないのだそう)というが、そのための工事費だつて余計にかかるのだ。

立木の所有者は石川県知事の責任を追及して、辞職を要求した。(この所有者の一貫した主張や御上に屈しない態度は、立派である)これを受け入れた形で県知事は辞任するという。

ぼくは思つのだが、石川知事にとっては、この辞任要求は、実は渡りに船だったのではないだろうか？なぜなら、政治資金をめぐって、知事は西松建設から100万円貰つていたことが明らかになつた矢先だつたからである。それまでは4選だか5選目に色気を見せていたことを考えれば、この辞任表明は、そのことの追求から逃れるためだと捕らえた方が自然だと思ふ。そして、それは見事に成功したのだ。

その証拠に民主党の小沢は、いまだに追求されているが、石川知事を追求するメディアは一つもないばかりか、かえっていさぎよいと思われている節さえある。これでは自民党の県政が、また持続されることは明白である。今度は女性の自民党候補が予定されているようだが、土建屋県政はさらに続くのだろうか？

またまた閑話休題。

みなさんは静岡空港をどう考えますか？

おそらくは開港当初は、やれチャーター便だ、それ静岡から空の旅へなどと、それなりににぎわうことだろう。

だがしかし、一通りのお祭りさわぎが終わった後は、どうなるのか？もともと必要でないのに無理矢理作った空港は、黒字経営など見込めるはずもない。

そんな赤字垂れ流しの地方空港は、全国にその例がたくさんある。しかも、そのことを一番自覚しているのも県なのである。

その証拠に、県は、赤字地方空港の例にならって、着陸代金(飛行機が空港に着陸することに航空会社が支払わなければならない使用料)の値引きや、定期便の就航をお願いするについて、搭乗率が採算を割った場合は、その分の赤字補填することを航空会社に約束したのである。

航空会社にとっては、赤字の心配はないのだから、これは破格の待遇というわけである。

ちよつと待ってくれよ、その金は県民の税金でしょう。誰がそんなことを許可したのだ？金輪際「富士山静岡空港」を利用するつもりのないぼくは、この分の県税の支払いを拒否したいな！

県税の無駄遣いの原因を作った石川知事は、赤字の責任をとって、せめて退職金は

放棄するぐらいのことを言ってから辞職してもらいたいな。

もう一つの愚政策

政府与党の景気対策と称する、このところの愚政策はいったいなんなのだ！

定額給付金もそうだったが、市民が望んでいない(静岡空港と同じ)のに、そして、たいして生活のプラスにならないのに、総選挙を前に人気取りのために税金をばらまくことだけはやめて欲しいな。ただでさえ、赤字財政を理由に半年前には、消費税アップをちらつかせていたのにである。

その一つが土日祭日の「高速道路料金千円」に値引きするというものだ。常々高速道路料金が高いと思っていたものだから、「千円」と聞いた民衆はこれに飛びついた。時あたかも、ゴールデンウィークであった。われもわれもと高速道路に飛び乗った。これも予想通りに大混乱、大渋滞、民衆は無理矢理金を使わされたあげく、残ったのは「あー疲れた！」の声ばかり。

一方、この愚政策を決めた張本人の麻生首相をはじめ政府の主だったところは、民衆の右往左往を後目に、緊急な課題もないのに特別機を仕立てたり、あるいはファーストクラスで連休を利用して、海外に物見遊山にでかけた。その結果、危機ラインギリギリといわれていた麻生内閣の支持率が

大幅に回復したのだとさ！与党にとっては「めでたし、めでたし」であつても、民衆は、そうはいかないのである。

「千円」で高速道路を走るにはETCを車に取り付けなければならぬという。これを一手に扱うのが国土交通省の天下り団体なのだそう、料金を現金で支払う場合は割引はしないのだという。こんな不公平がまかり通つてしまうことが、ぼくには不思議でならない。

しかも、この政策が愚かである最大の理由は、全世界が地球温暖化に真剣に取り組んでいるというなかで、CO₂排出の大きな要因である車の使用を促進することを政府自らがを押し進めたことである。

今度の連休中は高速道路の通行料(車の使用)が大幅に増えたのは反対に新幹線やフェリーなどの利用は大幅に減少したという。こちらは大量輸送が可能で、二酸化炭素の排出量も全体から見れば少ないのである。政府はなぜこちらの値引きを考えないのだろうか？(自分たちに直接利益がないからかな？)

これで政府の環境政策は、真剣ではなく表面を取り繕うだけのものだが、露呈した。補正予算が衆議院を通過したというが、一度凍結したはずの高速道路建設など箱ものがぞろぞろ頭をもたげてきた、やはり政権の交代は絶対に不可欠である。が、その民主党がな・・・。